

浄妙寺再考

－藤原道長が建てた菩提寺－

上原真人

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

浄妙寺再考

－藤原道長が建てた菩提寺－

上原真人

1. はじめに－藤原道長の仏教信仰－

藤原道長の信仰と日記　大河ドラマでは描かれなかったが、藤原道長(966～1028年)はあつく仏教を敬った。一方で安倍晴明や賀茂光榮等の陰陽師に頼り、賀茂詣・春日詣等の神社参拝も欠かさず、仏教一辺倒でないことは多くの日本人と共通する。しかし、12世紀以降に大流行する仏教信仰の三形態、すなわち、①弥勒信仰を一つの根拠とした経塚造営(金峯山詣)、②先祖供養のための墓寺・菩提寺造営(浄妙寺建立)、③阿弥陀信仰を一つの根拠とした浄土庭園のある寺の造営(法成寺建立)に関して道長は先駆者で、日本仏教史において果たした役割はきわめて大きい。宗教が心の問題とすれば、道長の心のうちは世界遺産(記憶遺産)になった自筆日記『御堂関白記』から直接わかる。平安時代は先例重視の時代で、貴族の日記は行事や政治にかかわる事実を記録し、自分や子孫が読んで政治行動や宮廷生活の参考にすることを主な目的として執筆された。

『御堂関白記』は道長30歳で内覧(天皇の相談役)になった時から書き始めた政治・行事の私的覚書である。しかし、事実記載が中心で、同時代の藤原実資『小右記』や藤原行成『権記』ほど心のうちは見えない。メモ的覚書はなかなか理解しにくく、現代語訳の文庫本(倉本2009)なしには読解できない点多かった。倉本は「豪放磊落な筆致と独自の文体」と褒めるが、道長は日記を書くのはさほど好きではなかったように思える。少なくとも、平安時代後期から鎌倉時代の日本各地における寺院造営や仏像建立にもっとも大きな影響をおよぼしたと評価され、阿弥陀浄土信仰にもとづく建築史・庭園史や美術史を叙述する上で欠かせない法成寺造営時には、『御堂関白記』は執筆をほぼ終えており、無量寿院と呼んだ時の九体阿弥陀堂落慶供養記事が残るにすぎない[寛仁4(1020)年3月22日条]。法成寺造営や供養の実体は『栄華物語』や『諸寺供養類記』『小右記』『左経記』等に豊富であるが、浄妙寺造営や金峯山詣のように、本人しかわからない想いや苦勞、息づかい、気遣いまで行間から読み取れる『御堂関白記』の記事はない。

たとえば寛弘4(1007)年8月の金峯山詣記事を通覧すると、写経・精進潔斎・経塚造営などの具体的行動に加え、同行者への配慮など、かけたエネルギーが半端でなかったこと

がわかる(京博2007)。彼の阿弥陀信仰に関しては、万寿4(1027)年12月、九体阿弥陀堂で阿弥陀如来に結んだ五色の糸を握り、北枕で西に臥して念仏を唱えつつ亡くなったとする『栄華物語』の記事が著名だが、『御堂関白記』最後の寛仁5年9月条には、1日 初念仏十一万遍、2日 十五万遍、3日 十四万遍、4日 十三万遍、5日 十七万遍と念仏数だけを記している。どのような想いで何を祈願し、5日間で計70万遍もの念仏をとこなえたのか不明だが、阿弥陀仏への傾倒ぶりは『栄華物語』や『小右記』だけでは読み取れない。一方、浄妙寺造営に関する『御堂関白記』の記事は具体的かつ詳細で、道長が先祖の菩提を弔い、一門の極楽往生を願う熱意が伝わってくる。

大江匡房が認識した道長の氏寺 仏教が重視するのは三宝、すなわち信仰対象である舍利や仏像(仏)、仏の教えとそれに関する注釈などの経典(法)、仏事を司る僧尼(僧)である。仏法僧がそろった場所が寺で、多くの寺が道長の周辺で確認できる。道長が参詣した寺には、京都観光でもおなじみの清水寺や広隆寺・仁和寺もあるが、藤原氏の氏寺と呼ばれる寺院造営やそこで施行した法会にかかわる記録が『御堂関白記』に散見する。

院政期の大学者、大江匡房(1041~1111年)の博識ぶりを示す『江談抄』には、「藤氏の氏寺のこと」として、大職官(鎌足)の興福寺・法華寺・施薬院、淡海公(不比等)の佐保殿、閑院大臣(冬嗣)の勸学院と南円堂、忠仁公(良房)の長講会、昭宣公(基経)の木幡墓、房前宰相の南円堂空羂索・四天王像、貞信公(忠平)の法性寺、九条右府(師輔)の楞嚴院(横川の法華三昧堂)、大入道殿(兼家)の法興院、中関白(道隆)の積善寺、入道殿(道長)の木幡塔・三昧堂(浄妙寺)と法成寺、宇治殿(頼通)の平等院を挙げる[岩波新日本古典文学大系『江談抄』第1(40)]。寺院以外の施設(佐保殿・勸学院・木幡墓)や特定の仏堂・法会・仏像も並記するなどの混乱もあるが、北家九条流に至る藤原氏の仏教信仰を具現化した施設についての、平安時代末期における一つの認識を示す。

とくに、撰閲家の嚆矢となる忠平の法性寺(現東福寺近辺に所在)や父兼家・兄道隆の法興院・積善寺(平安京外二条東に所在)に関しては、参詣記事だけでなく道長がおこなった仏像や堂の造営修理が『御堂関白記』に記録されている。しかし、大江匡房は法性寺や法興院・積善寺を道長の寺とは認識しない。自身が発願していないからだ。以下、『江談抄』が道長の寺と認識・明記した浄妙寺(木幡塔・三昧堂)について、『御堂関白記』や道長の意図を反映した供養願文(文献史料)と発掘調査(荒川・浜中ほか1992など)の成果(考古資料)の両面から検討を加え、日本仏教史・寺院史における浄妙寺造営の意義を考える。なお、以下『御堂関白記』引用箇所は年月日まで明記し、史料名は省略する。

2. 浄妙寺造営－先祖供養の墓寺－

浄妙寺造営の史的背景 浄妙寺の主要堂塔跡は、宇治市木幡赤塚4番地の木幡小学校校庭に所在する。南約1kmには、現在、宮内庁が指定・管理する宇治陵すなわち『延喜式』巻21「諸陵寮式」等を根拠とする冬嗣夫妻以下、藤原氏の墓所と藤原氏から入内した10～11世紀の皇后・中宮・女御等の墓所がある。指定地には後期古墳も多いが、藤原基経が木幡墓を藤原氏代々の墓所と定めたことが浄妙寺造営の史的前提である(波多野1969)。大江匡房の曾祖父である大江匡衡(952～1012年)が代筆した浄妙寺三昧堂供養願文〔寛弘2(1005)年10月19日「為左大臣供養浄妙寺願文」『本朝文粹』巻第13〕によれば、道長が父兼家に連れられて木幡墓所を詣でた時、古塚が累々とし幽玄寂々、仏儀なく、ただ春花秋月を見るだけで、法音も聞こえず、溪鳥嶺猿の音がするだけだったのに涙し、自分が出世したら、この山麓に一堂を造り三昧を修することを誓ったという。これが浄妙寺創建の動機だったことは、三昧堂創建供養で香を焚く時「現世の榮譽や寿命福祿を願うものではなく、木幡山に居ます先考・先妣や基経など先祖の霊の菩提を祈り、来たるべき一門の人々の引導極楽を願う(白仏言、此願非為現世榮耀、寿命福祿。只座此山先考先妣、及奉始昭宣公諸亡靈、為無上菩提。從今後、来々一門人々、為引導極樂也)」と道長自身が明言した事実からも明らかである〔寛弘2年10月19日条〕。三昧堂供養願文と同趣旨の記事は、匡衡の妻・赤染衛門による『栄華物語』にもある。

『栄華物語』は三昧堂創建供養年を間違っているが、道長訪問時に「石の卒塔婆一本」だけがあり、「僧坊を(三昧堂の)左右に建て」「中に馬道をあけて、十二人の僧を住ませ給ふ」という記事は他にない。同記事の末尾では夫の浄妙寺供養願文について「多く書き続けたれど、けしきばかりを記す。はじめの有様も聞かまほしう。よく願文のことばども、仮名の心得ぬ事ども交りてあれば、これにてえ写しとらず(色々書いてるけど状況説明ばかりで、初めの様子も知りたいものだ。願文も漢字ばかりで、仮名になりにくい内容もあつて写し取れない)」〔岩波古典文学大系『栄華物語』巻第15「うたがひ」〕と辛辣な批評を加える。大江匡衡は三昧堂も木幡塔(多宝塔)も願文を担当し、ともに『本朝文粹』に収録されている。学識豊富で多くの出典にもとづく美辞麗句が並んだ漢文は、筆者も十分に理解できない。奥方の批評に同感するが、道長の意を受けて作成した願文で、とくに寛弘4年12月2日「供養同寺塔願文」『本朝文粹』巻第13(以下「浄妙寺」多宝塔供養願文)と記す)には、寺の屋根景観を示す重要情報もある(本論文第3節参照)。

浄妙寺造営(Ⅰ)－三昧堂－ 浄妙寺の造営経緯は『御堂閔白記』に詳しい。自宅(土御門殿)から木幡寺(浄妙寺)まで往復するのは半日仕事であるが、道長は寺地決定から三昧堂供養に至るまで、13回以上も現地を訪れている〔長保6(1004)年2月19日、3月2日・23日、閏9月7日、10月23日、寛弘2年6月21日、8月3日、9月28日、10月3日・9日・

14日・17日・19日条]。道長は自身にかかわる工事現場の視察が好きだったようで、長和5(1016)年7月21日に焼亡した土御門邸の再建開始から竣工・移徙まで[同年8月19日～寛仁2(1018)年6月27日]60回以上も現場を検分している。工事の詳細を記しているわけではないが、施主なので色々注文したに違いない。

浄妙寺三昧堂より頻繁に土御門邸を視察した理由が、現場が身近にあったからだとすれば、法成寺造営地は土御門邸の隣なので、浄妙寺より頻繁に工事現場を検分したはずである。残念ながら法成寺造営進展時には、道長は日記を書いていない。もし日記があれば『栄華物語』や『小右記』には書かれていない道長の嗜好が色濃く記録され、浄土庭園を有する寺院の初源に道長がどれほど心を砕いたのかわかるかもしれない。

長保6年2月19日、木幡三昧堂の造営地が決まる。木幡山に至る山辺にあった鳥居の北を流れる川(堂ノ川)北の平坦地で、大和街道(現奈良街道)の東に決めたのは、安倍晴明や賀茂光榮などの陰陽師だった。なお、発掘では「山の頂を平げさせ給て、高き石をば削り、短き所をば埋めさせ給ひなどして、やがて三昧堂を建てさせ給ふ」[『栄華物語』]ほどの大規模な整地は確認できない(荒川・浜中ほか1992)。「三昧」とは雑念を排し、一つの信仰行為に専念することで、古代・中世には法華経を通じて真理を悟る法華三昧、阿弥陀仏の周囲を念仏巡行する常行三昧の語が頻出する。浄妙寺三昧堂供養願文は、貞信公が法性寺を建て三昧を修し、九条右府が楞嚴院を建て三昧を修し、先考(兼家)が法興院を建て三昧を修したと、歴代の伝統を強調する。木幡三昧堂は長保6年3月より本尊の普賢菩薩を彫刻し、法華三昧を始める創建供養までに、法華経百部千軸、般若心経百巻を奉書し、百余口の賢聖衆に依頼し、香花梵唄、洪鐘浮磬、宝蓋幢幡、名衣上服、七珍百味をもってこれを供養した。願文は三昧堂と記すだけだが、法華三昧堂と考えて間違いない。

東大寺上院の法華堂(羈索堂・三月堂、8世紀第2四半期)は起源的にも機能的にも関係づけにくい。系譜的に浄妙寺三昧堂につらなる法華堂は、弘仁3(812)年7月に比叡山東塔で最澄が建てたのが初例である。檜皮葺の方五間堂で、行道と座を併用する半行半座の行場である。頂を金銀如意宝形で飾り、堂内に高3尺の金銀多宝塔と多宝仏像1体、妙法蓮華経1部を安置したという[『山門堂舎記』]。東塔法華堂は現存しないが、西塔法華堂は常行堂と渡り廊下で連結した「にない堂」として著名で(図1)、天長2(825)年に延秀と寂光大師(圓澄)が建立。伝教大師御筆経と金銅阿弥陀・普賢を安置した[『同上』]。以後、9世紀中頃～11世紀前葉には醍醐寺西三昧堂(942年)・比叡山横川法華堂(954年)・多武峯法華堂(964年)・法成寺法華三昧堂(1020年)など普賢菩薩を本尊とする例が顕著で(清水1992)、浄妙寺法華三昧堂もその系譜上にある(図2)。

なお、道長玄孫の藤原忠実は、三昧堂造営が子孫繁栄をもたらすと考えていたという

(繁田2023) [岩波新日本古典文学大系『中外抄』下巻 久安6 (1150)年7月17日条(24)項]。
 しかし、同時代史料から道長が子孫繁栄を願い浄妙寺三昧堂を建てたとは読めない。供養
 願文は「孝鍾愛之子孫」「近習旧勞之僕妾」も、「同胞兄弟芳骨」を埋め築いた「二恩父母
 廟壇」に陪侍して供養し続けることはできないので、三昧堂を建て供養する意義を先例を
 挙げながら強調し、それが「功德遍于法界。利益及于衆生。我願已滿。衆望亦足。以此一
 善、廻向四恩。天下安穩。万民快樂」と天下万民に功德をもたらすと述べる。

三昧堂供養と寺名決定 寛弘2年10月19日、木幡寺三昧堂の創建供養が盛大に執りお
 こなわれた。道師を勤める前大僧正観修をはじめとする11名以上の僧侶、納衆40名、讃衆・
 梵音衆・錫杖衆各20名など100名を越える演者が法会を執行し、上達部16名以上の参加と
 2名の不参加を『御堂関白記』は記す。また、内蔵寮・冷泉院・花山院・皇太后宮・中宮・

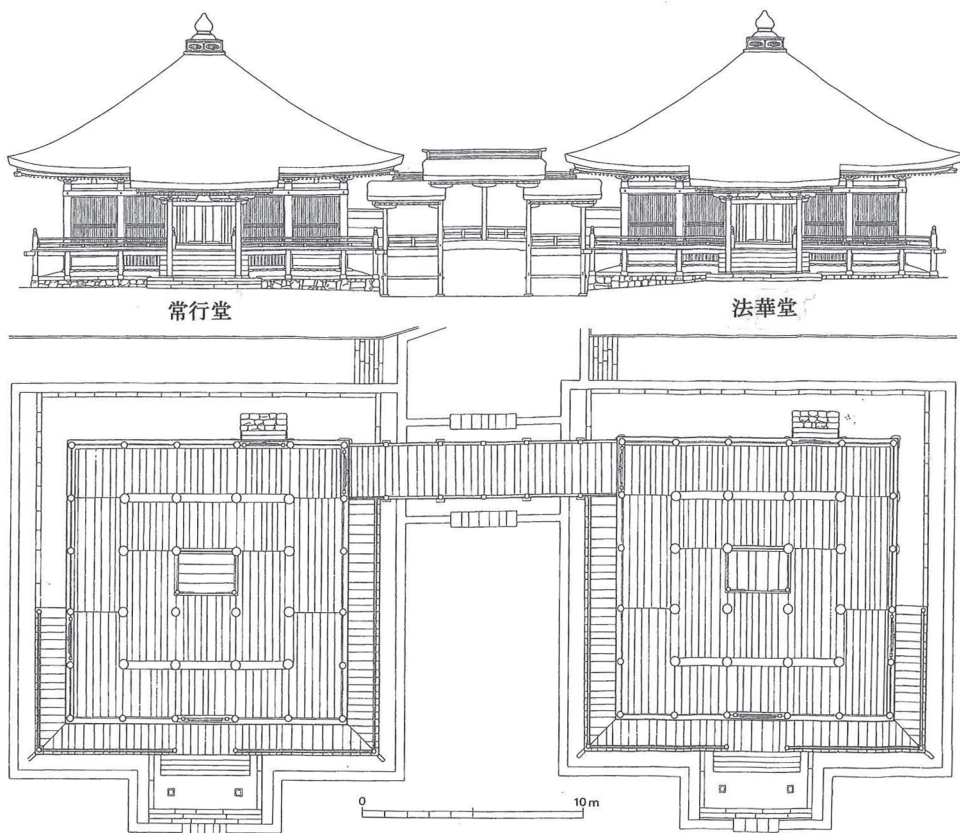


図1 延暦寺西塔常行堂と法華堂(荒川・浜中ほか1992)

弘仁年間に最澄等が東塔に建てた法華堂(根本法華三昧院)と常行三昧院(般若三昧院)は現存しないが、西塔に圓澄等が建て
 た法華堂(東)と常行堂(西)の後身が残る。背後を廊で結ぶ「にない堂」である。前者は普賢菩薩、後者は阿彌陀如来を本尊とする。
 常行堂本尊は常に阿彌陀如来だが、法華堂本尊は定型化していない(清水1992)。

一品宮からの豪華な布施が読み上げられた(御諷誦文)。法成寺金堂供養時に行幸行啓すなわち天皇中宮等が列席したのに比べ格が落ちるが、浄妙寺は平安京から離れている。道長も供養当日は倫子と共に時寅(午前4時頃)に土御門邸を出発し、辰始(午前7時頃)に到着している。上記関係者集結の事実を強調すべきだろう。

前日、正月に大極殿でおこなう御齋会に浄妙寺供養会が準ずるといふ天皇のお墨付きをもらい、かなり堅苦しいイベントになりそうだったが、香を焚く清浄火を道長は自ら火打石を打って一回で火をつけて感動をよび(祈請打火不及二度、一度得火、感涙数行。見聞道俗流涙如雨)、堂僧も苦手の新法螺貝をうまく吹いて喝采を浴びている(堂僧時刻吹螺、新螺声未調不快。余作念言、始吹螺、欲奉三宝。取螺試吹之。螺声長大也。萬人感悦之由)。主催者としてサービス精神も旺盛だ。なお、「浄妙寺」名は別当になった観修がつけたもので、南門の真書体、西門の草書体の寺名額を書いたのは三蹟の藤原行成だった。日記でも道長の命令で額を書いたと述べている [『権記』寛弘2年10月18日条]。

木幡寺は地名にもとづく呼称で、浄妙寺は仏典を根拠とした法号である。飛鳥寺が法興

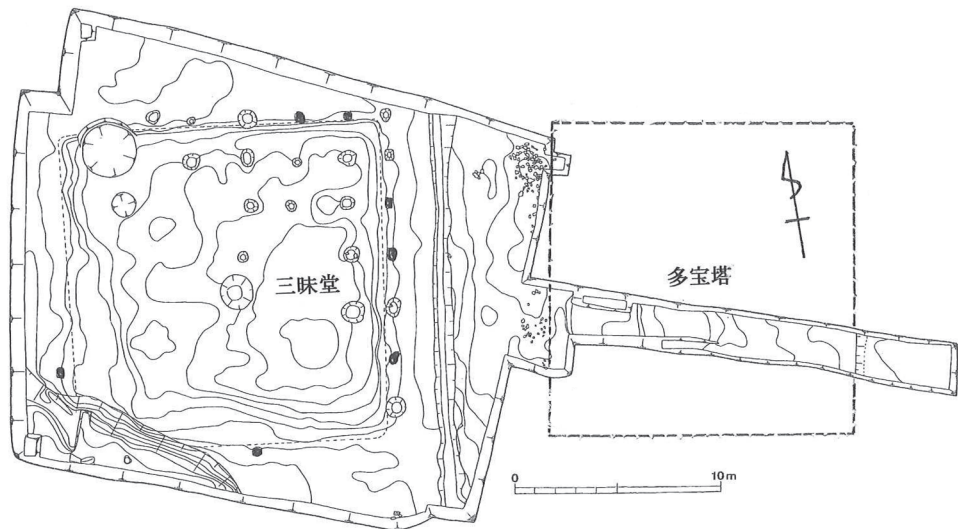


図2 浄妙寺三昧堂・多宝塔遺構図(荒川・浜中ほか1992に加筆)

浄妙寺法華三昧堂は康尚作の普賢菩薩を本尊とし、藤原氏一族の墓(木幡墓)供養のため道長が建てた。漆喰化粧した亀腹基壇上面の礎石はすべて抜き取られていたが、9か所で抜き取り穴を確認。方五間(三間四面)方形堂で、四方に縁が巡ることがわかった。基壇南西隅の落ち込みで3時期の火災層・炭化物堆積を検出。黒塗りで示した残存縁東礎石のうち、南西の礎石は第1回の火災後の整地土に据えられ、第2回目の火災層がこれを覆う。基壇中央の土坑は鎮壇具埋納坑? 木幡墓の存在を疑い藤原氏の主導権獲得が浄妙寺造営の目的とする説もあるが三昧堂供養願文は、昭宣公(基経)の「点木幡墓所」、貞信公(忠平)の「建法性寺修三昧」、九条右相府(師輔)の「建楞嚴院修三昧」、先考(兼家)の「建法興院修三昧」を列記するので、法華三昧堂は藤原北家代々が設けた菩提祈願施設の総決算と考えられる。浄妙寺以後、墓所に法華堂を建てる風習が一般化する。三昧堂の東には寛弘4年12月2日供養の多宝塔があったと考えられるが、削平が著しく確証は得られていない(荒川2005)。しかし、古くからあった造成面を多宝塔跡とすれば、東西位置関係は延暦寺西塔の常行堂と逆だが、規模や配置は「にない堂」に似る。

寺(平城京に移転後は元興寺)、法隆寺が斑鳩寺の異名を持つように、同じ寺を地名と法号で呼ぶことは古代に一般的である。木幡寺は供養前の呼称で、大江匡衡が作った「木幡寺鐘銘并序」[『政事要略』]には、まだ「浄妙寺」の名はない。『御堂関白記』における「浄妙寺」初出は寛弘2年10月17日で、三昧堂供養の直前、すなわち行成に寺額を依頼した時点で決定したらしい。供養に列席した藤原実資も『小右記』19日条(木幡寺供養事、法号浄妙寺儀)で「参着寺之間、見額銘書浄妙寺(寺に着いて額を見たら浄妙寺と書いてあった)」と記すので、供養当日まで関係者以外は誰も知らなかったようだ。

法号を寺額設定時に決めるのは11・12世紀には一般的で、土御門邸に隣接する寺名を法成寺とすることも、金堂創建供養の一週間ほど前から検討している[『権記』]。後白河天皇の女御で皇太后の建春門院(平滋子)が法住寺南殿の南西に造営した最勝光院の法号も、供養時に公開され、藤原兼実は「此日、新御堂供養也」の記事に「名最勝光院。建春門院御堂也。余依院宣書額銘」と自分が書いたことを誇らしげに注記する[『玉葉』承安3(1173)年10月21日条]。「新御堂」は建春門院の御所内にある持仏堂=旧「御堂」に対する呼称で、奥州平泉で藤原秀衡が建てた無量光院が「新御堂」と呼ばれた[『吾妻鏡』文治5(1189)年9月17日条「寺塔已下注文」]理由も、平泉館内にあった持仏堂に対する呼称である(上原2001)。三昧堂供養前に準備したのは、供養願文が明記する仏像・経典・供養具や法号を書いた寺額にとどまるわけではない。すなわち、寺域を区画する垣[長保6年3月23日条]、梵鐘[寛弘2年9月28・29日、10月15日条]、咒願文[同年10月18日条]を供養前に準備した。以下、道長がこだわった梵鐘(釣鐘)鑄造についてふれる。

浄妙寺造営(Ⅱ)－梵鐘－ 童謡では寺の鐘は地域に時を知らせているが、古代寺院では学校のチャイムのように僧尼の共同生活や法会の節目を告知した。7世紀後半～10世紀中頃および12世紀中頃以降の梵鐘は実物が残るが、10世紀後半～12世紀前半の実例は少なく「空白の2世紀」と呼ばれている(杉山1995)。浄妙寺鐘はその空白を埋める資料となるが実物は残っていない。しかし、『御堂関白記』に鑄造記録が残る。梵鐘は掘った穴に鑄型を据え、熔けた青銅を流し込んで鑄造する。釣鐘は重いので工房で作って運ぶより、材料を現地に持ち込んで鑄造する出張製作(出吹)が一般的で(五十川2016)、各地の寺院跡から梵鐘鑄造遺構が検出されている(神崎1993)。浄妙寺鐘も「出吹」で製作された。梵鐘鑄造土坑は深いので、浄妙寺跡でも地下に残っている可能性が高い。

道長は帥(藤原伊周)・春宮大夫(藤原道綱)・右衛門督(藤原斉信)・中宮権大夫(源俊賢)・権中納言(藤原隆家)・左大弁(藤原行成)・大蔵卿(藤原正光)・修理大夫(平親信)・三位中将(藤原兼隆)・宰相中将(源経房)等の上達部を引き連れ、寛弘2年9月28日早朝(卯時許)に出発。昼頃(午時)に木幡寺梵鐘の鑄造現場を視察した後、客殿で食事をして、夜中に帰

宅した。鑄込作業は道長等が見ている前で進められ、熔解銅が不足し龍頭部分まで行き渡らず、追加鑄入する仕儀となった。時が経って鑄入して大丈夫か、道長は不安でいっぱいだが、工人の賃金は支払っている(銅鐘不足不快、仍加焼銅鑄、加之時刻多移、不審無歟、工等賜禄)。発注者は出来映えだけを問題視すればよいのに、道長は上達部を引き連れて鑄込み現場を視察。作業段取まで気にかけている。なお、法成寺鐘も九体阿弥陀堂(無量寿院)供養(寛仁4年3月22日)に先立つ2月20日に清和院(土御門殿の北)で鑄造するが失敗。3月18日に改めて鑄造し落慶供養に間に合わせた『左経記』。少なくとも道長は、梵鐘を寺院供養の必須アイテムと考えていたようだ。

翌29日、現場責任者である藤原貞中から、型の上を開けて覗いたら龍頭はできている(従木幡貞中申云、鐘龍頭間、開見成了者)との報告を受ける。しかし、鑄型を壊して鐘全体がわかった当日にも、息子の頼通の様子見に派遣している[寛弘2年10月15日条]。道長はかなりの心配性である。供養当日には、この鐘の音を聞き、道長は「鐘の音は思った通りだ(鐘聲如思)」と御満悦だった。

この鐘銘も大江匡衡作の案文を、藤原行成に清書させた[寛弘2年8月25日条]。行成の日記によれば、彼が鐘銘を道長に提出したのは9月20日。浄書に手間取った理由はわからないが、鑄造2日前に貞中から鐘銘2行を彫刻し損なったと連絡があり、直ちに書き直している(貞中朝臣来、示鐘銘彫損二行之由。即書之[『権記』寛弘2年9月26日条])。なかなか慌ただしいが、行成直筆の鐘銘を外型に直接裏貼りして彫刻したのだろう。梵鐘鑄造遺構を発掘すれば、行成直筆の文字を刻んだ鑄型片が出土するかもしれない。鐘銘には発願者・鑄造年月・鑄物師名などを記すのが一般的だが、『政事要略』の「木幡寺鐘銘并序」は序文に鑄造経緯を略記し、銘文自体は美辞麗句が並ぶ功德祈願である。

浄妙寺造営(Ⅲ)－多宝塔－ 浄妙寺多宝塔に関しては、三昧堂供養の2年後、突如『御堂関白記』に「到木幡塔処。以明肇僧都、对方、普門寺塔金物借持来」の記事が現れる[寛弘4年10月10日条]。明肇は三昧堂供養で散花をおこなった律師であるが、普門寺がどこにあるかわからず、その塔金物を借りて持って来たという状況も理解しがたい。浄妙寺多宝塔は初出から2か月弱で供養されており[寛弘4年12月2日条]、建設地決定から供養会まで1年8か月を要した三昧堂に比べ造営期間が著しく短い。図2のように三昧堂と多宝塔の平面規模がほぼ等しいとすれば、二層構造の塔建設に手間が多くかかるはずである。塔金物だけでなく塔自体を移築した可能性もあるが、多宝塔供養願文は、浄妙寺は仏像も經典も禅侶も鐘楼・房舎・庖浴もあり「道場之体」を備えているが塔婆がないので「新結構多宝塔一基」と記し、新築であることを明言する。三昧堂造営期間が長いのは、整地や寺院地区画・房舎など付属施設の造営も含めれば問題ない。塔金物に関しては、三昧堂に

はない部材の見本として借用したと理解しておこう。

なお、木幡寺関連記事を欠く寛弘3(1006)年は、前年11月15日に焼亡した内裏の復興工事や貞信公忠平が創建した法性寺五大堂の新造に向け、道長は多忙をきわめていた〔寛弘2年12月21日、同3年7月27日、同8月7日、同10月24・25日、同12月8・24～29日条〕。多宝塔供養願文から判断すると、浄妙寺造営の当初計画に多宝塔はなく、寺に塔が必要だという認識から新たに造営を決めたようである。三昧堂造営中は13回以上現地を訪れたのに、供養直前の3回の木幡塔所訪問記事〔寛弘4年11月23・28日、12月1日条〕も内容は簡単で、道長は多宝塔造営にさほど熱心だったとは思えない。供養当日も、上達部の不参加者2名と法会を主導した僧名、法会演者数や内蔵寮・冷泉院・皇太后宮・中宮・春宮による御諷誦使名などを列記するのみで、三昧堂供養会のような詳細な式次第や火打・法螺にみる道長自身の演出も記録していない〔同年12月2日条〕。『栄華物語』は浄妙寺に多宝塔があったことすら記していない。

ただし、道長は多宝塔の本義を理解していた。多宝塔の呼称は、地中から出現し空を飛来する塔中に座す多宝如来が、釈迦の説法を礼賛し、半坐を釈迦に譲り二尊で塔内に結跏趺坐したという『法華経』11卷「妙法蓮華経見宝塔品」に由来する。浄妙寺多宝塔は「釈迦・多宝二如来、普賢・文殊・観音・勢至四菩薩」を安置するので〔供養願文〕、この原則にしたがっている。日本最古の多宝塔図とされる長谷寺銅板法華説相図(7世紀末)は、初層に結跏趺坐二尊像を表現し『法華経』の教説を踏襲するが、塔は3本の相輪をもつ三層塔で、真言・天台寺院をはじめとする平安時代以降の多宝塔と形態が異なる。一方、最澄が近江・山城・下野・上野・豊前・豊後国に計画した「六処宝塔院」は、内部に法華経を安置しており、『法華経』の教説には合致しない。

空海やその弟子・孫弟子たちも多宝塔を造営した。空海の弟子＝実恵に学んだ恵運が開祖となる安祥寺下寺後身寺院の多宝塔には、大日・阿闍・宝生・阿弥陀・不空成就の五智如来が安置されていた。同塔は明治39(1906)年に焼失したが、京都国立博物館に寄託されていた五智如来は9世紀中葉の基準作として国宝に指定された。五智如来は貞観9(867)年『安祥寺資財帳』が記す安祥寺上寺礼仏堂の本尊とする説が有力だが(根立2004)、大日如来(毘盧遮那仏)を中心にした四方仏(五仏)を塔に安置する例は少なくない。少なくとも、空海が一時期拠点にした高雄山神護寺の多宝塔に安置された五大虚空蔵菩薩は承平元年(931)年『神護寺実録帳』が記録しているので本来の姿である。ただし、『安祥寺資財帳』は安祥寺下寺の塔を「毘盧遮那五輪卒都婆」、『神護寺実録帳』は同塔を「毘盧遮那宝塔」と記し「多宝塔」と呼んでいない。天台宗でも真言宗にならない、五仏・四方仏を安置する多宝塔が一般的で(清水1992)、浄妙寺のように『法華経』の本義にしたがった多宝如来と釈

迦如来の二尊を本尊とする多宝塔は多くない。

しかし、藤原威子(道長の娘で後一条天皇の中宮)が「多宝の御塔一尺よばかりを造り磨きたてさせ給て」、御持仏にするために、万寿元(1024)年9月23日から院源僧正や講師10人を招いて土御門邸で供養した時は、「御塔の有様を見れば、かの見宝塔品の湧出現の塔もかくこそはと、めでたう耀き見えたり」「そのうちに釈迦・多宝、座をわけて並ばせ給へる程など、二つの如来の光に、御前より始め奉り、見仏聞法の人、皆照され奉りたりと見ゆ」と描写されているので『栄華物語』巻第23「こまくらべの行幸」、道長の周辺では『法華経』の本義にしたがった多宝塔が作られていたことがわかる。

3. 浄妙寺の史的意義と創建時の屋根景観

一族結束意図の有無 以上、浄妙寺は藤原一族の墓所に建てた法華三昧堂と多宝塔を主要堂塔とする寺院である(図2)。ただし、三昧堂供養願文が木幡墓所に対する「造一堂修三昧」の経緯・意図を明記するのに、多宝塔供養願文は寺に塔があるべきだという常識を強調し、塔造営は当初計画にない可能性が高い。供養願文は大江匡衡が作成したが、道長の意図を反映しており、三昧堂重視、多宝塔=付属施設は道長の考えである。『御堂関白記』の記事もそれを示す。道長自身が造営経緯を記載したにもかかわらず、浄妙寺の史的意義を論じる研究は法成寺に比べて少ない。『御堂関白記』を中心に道長の生涯を描いた本(山中1988)でも、浄妙寺の史的意義や彼の信仰のなかでの位置づけはない。

供養願文が藤原一族の墓を祀るため浄妙寺を造営したと明言するにもかかわらず、当地が基経が定めた藤原氏の墓所であることにも疑問を呈し、浄妙寺造営を道長が藤原氏の頂点に立つための政治行動と解し、一族結束の象徴と評価する研究もある(林屋1941、堅田1965)。木幡を藤原一族の墓所とする伝えが道長の創作とは考えられないが、法華三昧堂の創建供養時に関係者が多数集まり、浄妙寺が一族結束の場となったことは事実である。しかし、供養後は公卿10人ほどで父兼家・母時姫・姉詮子墓を訪れた記事[長和6年2月27日条]があるだけで、とくに浄妙寺が一族結束の寺になったと思えない。

墓を築き寺を建てる行為が、信心以外の社会的意義を有するのは当然だが、一族結束の意図を強調できるか否かは、他の信仰行為との比較・相対化が必要である。たとえば、平安時代に恒例化した(奈良)春日詣は、参加者や規模から確実に一族結束のかなめとなっている。浄妙寺法華三昧堂の竣工後、木幡塔所記事以前の寛弘4年2月28日、道長は3度目の春日詣に出立する。藤原行成や実資も同道したので『権記』『小右記』にも参詣記事がある。御供には公卿11人、殿上人10数人、四位以下数十人がいた。巳時(午前10時頃)集合し、未剋(午後2時頃)道長の宇治殿に到着。饗宴。宿泊する佐保殿に着いたのは亥剋(午後10

時頃)だった。翌29日は、昼頃に春日社に行き、神宝奉納や奉幣、神馬を奉献し、神楽を見る。30日は巳剋に佐保殿を出て、般若路から泉川を越え、未剋に宇治殿に着いて饗宴。夜に平安京にもどった。往復の間、平安京と宇治殿との間にある浄妙寺に寄って墓参する時間的余裕は十分にある。墓参と春日詣が相容れない性質だったのかもしれないが、法華三昧堂供養時や墓参時よりはるかに多くの公卿や殿上人・貴族と行動をともしめる機会があっても、浄妙寺参詣を強要しなかったことは確実で、道長が浄妙寺に一族結束の特別な機能を与えたとは思えない。祖先や父母兄弟の菩提を願う純粋な宗教心から、浄妙寺を造営したと考えると何ら問題ないだろう。

浄妙寺は菩提寺の初例 法華三昧堂がある寺は少なくない。前述の比叡山東塔・西塔・横川、醍醐寺、多武峰法華堂を含め、清水擴は文献史料から浄妙寺法華三昧堂より古い法華堂14例、より新しい平安時代法華堂21例を挙げる(清水1992)。奥州藤原氏の毛越寺跡では、比叡山西塔と同様、常行堂と並ぶ「にない堂」形式の法華堂が発掘された(藤島1995)。ただし、浄妙寺のように法華三昧堂を本堂とする本格寺院は他に確認できない。

中世以降、寺院と墓所・墓地は不可分となり、菩提寺の呼称も一般化する。しかし、飛鳥寺に始まる初期氏寺は「為君親之恩」[推古紀2年2月条]が造営理由でも、寺院地内に墓はなかったし、墓所・墓地に対して寺や堂塔を設けることもなかった。寺院地内における墓は、8世紀後半以降の祖師墓にさかのぼる(上原2013)。一方、浄妙寺造営以後、個人墓に法華堂を建てた例(1015年冷泉上皇墓、1036年後一条天皇墓)、法華堂に遺体や遺骨を安置した例(1145年待賢門院璋子墓、1170年二条天皇墓、1176年六条天皇墓、1181年高倉天皇墓、1176年建春門院平滋子墓、1192年後白河法皇墓)が目立つ(清水1992)。平清盛も死に際し、遺骨は播磨国山田法花堂に納めて7日ごとに形式的に仏事をおこない、東国対策に専念するため京都での追善は不要と遺言した[『吾妻鏡』治承5(1181)年閏2月4日条]。このうち後一条天皇墓は菩提寿院、璋子墓は法金剛院、二条天皇墓は香隆寺、六条・高倉天皇墓は清閑寺、滋子・後白河法皇墓は蓮華王院と、寺院地内や寺院付属形式で築かれた。これらを皇族の陵寺とするなら、法華三昧堂ではないが仁明天皇陵築造時に平安宮清涼殿を移築した嘉祥寺(851年)が浄妙寺先行例となるかもしれない。

鎌倉時代には、墓所にともなう「墓堂」「墓所堂」[『明月記』建久7(1196)年4月14日条、正治2(1200)年閏2月11～12日条、建暦2(1212)年10月11日条]に加え、「墳墓堂」の呼称が『吾妻鏡』に頻出する[正治元(1199)年7月6日、建仁2(1202)年6月1日、寛喜2(1230)年9月18日、同3年10月27日、貞永元(1232)年5月条]。そのなかには源頼朝・北条義時の法華堂もある。国指定史跡法華堂跡(源頼朝墓・北条義時墓)は2005年に鎌倉市が発掘。縁がめぐる方三間堂(一間四面堂)を検出した(鈴木2010)。法華堂は方五間が本来

の規模だが、最小規模の方三間堂も法華堂と認知されるようになったのである。考古学的にも12世紀以降、中世墓地に方形堂＝墳墓堂をとまなう例が、各地で20例ほど指摘されている(中世葬送墓制研究会2010)。墳墓堂には阿弥陀堂がふさわしいと思われがちだが、史料的には墓所に阿弥陀堂を建てる例は少なく(清水1992)、頼朝墓・義時墓から類推すれば、これら方形堂は法華堂だった可能性が高い。つまり、浄妙寺造営を契機に、法華三昧の行場＝法華堂を墓寺・墓堂へと昇華する路が開けたのだ。

道長存命中は娘の嬉子(敦良親王=後朱雀天皇妃)や妍子(三条天皇皇后)が木幡墓に埋葬されたが、以後、道長(1028年死去)・頼通(1074年死去)・基実(1166年死去)が木幡墓に埋葬され、九条良通(1188年死去)・教実(1235年死去)の遺骨が浄妙寺に分骨された(荒川・浜中ほか1992)。祖師墓を設けた寺や皇族の陵寺は特定の個人墓を礼拝対象とした寺で、一族の墓にかかわる菩提寺とは一線を画す。大江匡房は浄妙寺を藤氏の氏寺と性格づけたが、道長の死後は撰閑家菩提寺としての機能が明確になったのである。つまり、浄妙寺は中世以降の菩提寺や、近世檀家制度(寺請制度)を支えた墓地と寺とを結びつける初現例となる。すなわち、氏寺から菩提寺へという古代から中世への寺院の大きな性格変遷を考える上で、浄妙寺がもつ仏教史・寺院史上の意義はきわめて大きいのである。

創建浄妙寺を檜皮葺とする説 以上、道長が単なる氏寺ではなく一族の菩提寺をめざして造営した浄妙寺は、当然、寺院として格調高い外観を有したはずだ。大江匡房が道長の寺として浄妙寺と併記した法成寺には、金堂に最新の高麗系瓦当文様をあしらった緑釉瓦を葺いた。その瓦は丹波国司が管轄した丹波系瓦屋(おもに京都府亀岡市に所在)で生産されたが、伝統的な中央官衙系瓦屋も無釉で同文様の瓦を生産・供給した(上原2010)。ただし、鴨川氾濫原に立地する法成寺跡は遺構の残りが悪く、緑釉瓦という特徴から金堂所用瓦が推定できても、九体阿弥陀堂や薬師堂・五重塔等の諸建物の所用瓦を特定し、編年することは難しい。これに対し、浄妙寺の遺構は残りがはるかに良い(図2)。

浄妙寺跡の発掘調査では、瓦はわずかししか出土しておらず(図3)、創建三昧堂や多宝塔の屋根は檜皮葺で、瓦葺ではなかったと想定されている。平成2年度発掘報告書(荒川・浜中ほか1992)によれば、浄妙寺三昧堂は3度の火災を受け少なくとも2回再建されたという。3度目の火災は寛正3(1462)年10月23日[『碧山日録』]で浄妙寺終焉に対応するが、各再建年代は確定できない。報文は「出土した瓦の総量が少ない」が、「塔跡周辺から出土した瓦のほうが、三昧堂跡周辺から出土した瓦より古い様相を示し」「浄妙寺の創建期に遡りうるものが、僅かではある」としながらも、「これをもって創建当初から瓦葺きの建物であったとするのは困難で」、平瓦の出土量などを根拠に「平安時代後期の段階では瓦葺きに転換していた」と考える。具体的には道長曾孫の藤原師通が木幡堂舎の損所を巡

検した記事 [『後二条師通記』康和元(1099)年5月23日条] に注目。「この年の1月24日には京都周辺で大地震があり」「浄妙寺もこの地震で大きな損害を受け、この修理を契機として瓦葺の建物に変えられた」と考えた。

一方、「最下層の火災層には瓦を含まず」と認定した杉本宏は、出土した軒瓦を「少数の創建頃のもの」「平等院や金色院と同関関係にある12世紀前半に比定できる河内系」「13世紀後半代の中世期瓦」に三分し、「三昧堂は檜皮葺で創建され(1期)、焼失後12世紀前半、ちょうど平等院が改修され金色院が建てられているときに、河内系瓦葺の三昧堂が再建(2期)され、さらに再度焼失し13世紀後半期に中世瓦葺三昧堂が再建(3期)されたと考えられる」と述べ、三昧堂・多宝塔ともに檜皮葺の「浄妙寺復元想像図」を掲載した(杉本2006)。さらに、11世紀にさかのぼる浄妙寺出土軒瓦を、道長の法成寺瓦、頼通の高陽院瓦、法勝寺金堂院東回廊下層瓦(藤原師実の白河院所用瓦)、頼通の平等院瓦と比較検討した浜中邦広は、「浄妙寺出土の中央官衛系瓦は11世紀中葉より前には遡れず」「現時点で

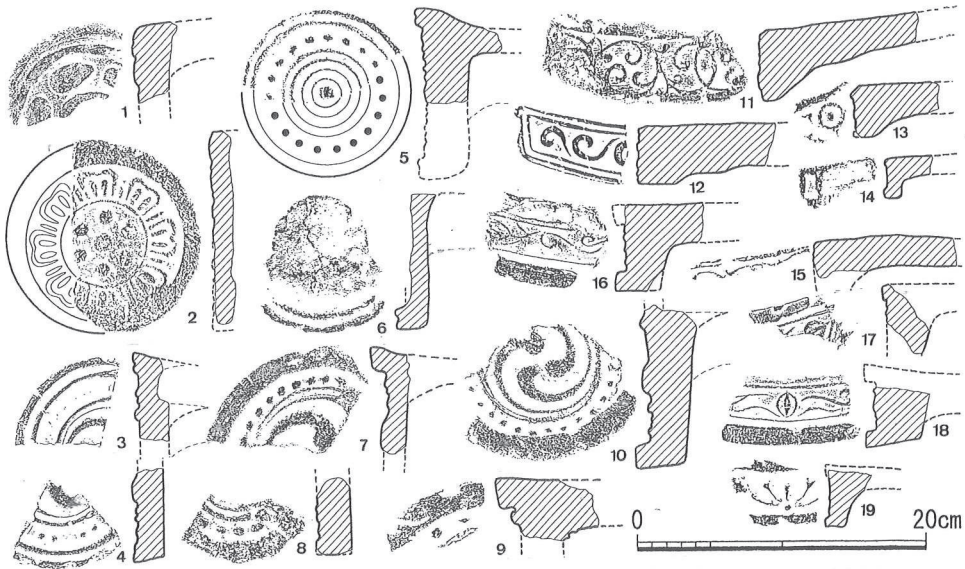


図3 浄妙寺跡出土軒瓦(荒川・浜中ほか1992、浜中2007 番号は報告書を踏襲)

浄妙寺では法華三昧堂跡や多宝塔跡の周辺で瓦が出土したが、量が少ない。維持管理が行き届いた寺では、修理・再建時に離れた場所に穴を掘って不要な瓦を埋める(瓦溜)のが当然で、堂塔周囲から瓦が大量に出土することは望めない。1は11世紀前半の中央官衛系単弁6葉蓮華文軒丸瓦で池田瓦窯産(植山1999)。2は11世紀後半の中央官衛系複弁8葉蓮華文軒丸瓦。11は11世紀中葉の中央官衛系均整唐草文軒平瓦で、法勝寺金堂院東回廊下層に類例がある。14は12世紀後半の中央官衛系剣頭文軒平瓦。5・6を河内向山窯産とする浜中説に従えば、12・13とともに藤原寛子・忠実が平等院鳳凰堂の改造・修理に用いた瓦で、11世紀末～12世紀前半。3・4、7～10、17・18は中世の巴文軒丸瓦と唐草文軒平瓦、19は近世・近代の唐草文軒平瓦(混入品)である。出土量が少ないだけでなく、時代も広範に及ぶので、浄妙寺の消長を反映していることは確かだが、各時代の屋根景観を出土瓦から想定するのは難しい。しかし、1は法成寺金堂創建瓦にない一本作り軒丸瓦であることから、法成寺に先立つ可能性がある。筆者は大江匡衡の多宝塔供養願文から、浄妙寺の主要堂塔は給瓦葺だったと考える。

は創建期(11世紀初頭)にはならない」と年代づけた。加えて「浄妙寺の中心堂宇は三昧堂と多宝塔で」「平面方形プランの堂宇の屋根は一般的には宝形造であり、棟をもたず、一部に軒瓦を葺くということは考えにくい」「軒瓦の存在からはいずれも総瓦葺きの屋根にしか想定できない」と屋根景観について考証し、藤原頼通の沙汰で道長創建の檜皮葺屋根の「三昧堂が総瓦葺きに変更された」と想定した(浜中2007)。その後の論考でも、浜中は「道長の浄妙寺から頼通の浄妙寺へ」の移行を強調している(浜中2024)。

以上、平成2年度の浄妙寺跡発掘調査関係者は、いずれも道長が創建した浄妙寺三昧堂の屋根は檜皮葺で、子の頼通もしくは孫の藤原寛子、曾孫の藤原師通、あるいは玄孫の藤原忠実が総瓦葺に改変したと考えた。これを受け、金峯山埋経1000年を記念し道長にかかわる資史料を総括的に展示した図録では、浄妙寺について「建物は建設当初は檜皮葺であり、瓦は葺かれていなかった」と解説している(京博2007)。その後、平成21年度に三昧堂の南西と南で築地塀と堂ノ川旧流路が発掘されているが、屋根景観について異論は提起されていない(宇治市歴史まちづくり推進課2010)。

浄妙寺は創建時から瓦葺だった 前述のように、浄妙寺三昧堂・多宝塔は檜皮葺で創建され、11世紀後半以降に総瓦葺になったとするのが定説である。平安京のように宮殿・御所や官衙・邸宅が集合し、長期にわたり存続あるいは建て替えられた遺跡では、他所の瓦が混入する可能性が高いが、浄妙寺のように孤立した寺院跡で出土する瓦は、同寺に瓦を使った建物があったことを示す。三昧堂も多宝塔も平面正方形の宝形造で、軒瓦を含む出土瓦が総瓦葺屋根を構成したことは浜中が考証した通りである。隅切瓦が出土した事実も浜中説を裏づける。図3で解説したように、浄妙寺瓦は出土量が少ないだけでなく、時代も広範におよぶ。創建位置で堂塔が再建され存続した寺では、離れた場所に穴を掘って瓦を廃棄するので、建物周囲で創建瓦がまとまって出土することは望めない。瓦溜を検出すれば、浄妙寺瓦にかかわる確実な情報が得られるはずだが、現時点の貧弱な資料では確言できない。しかし、私は図3-1は浄妙寺創建時までさかのぼる可能性が高いと考えている。少なくとも、中央官衙系一本作り軒丸瓦が法成寺跡から出土しないのは、古く木村捷三郎が指摘した通りだ(木村1969)。また、藤原頼通が創建平等院や再建法成寺で採用し、その影響下で後三条天皇が円宗寺創建や平安宮再建に用いた南都系・丹波系・初期播磨系瓦(上原2006)は浄妙寺瓦に皆無で、同時代の中央官衙系軒瓦の認定には検討の余地があるとしても、頼通が浄妙寺を総瓦葺にしたとする浜中説には同調できない。

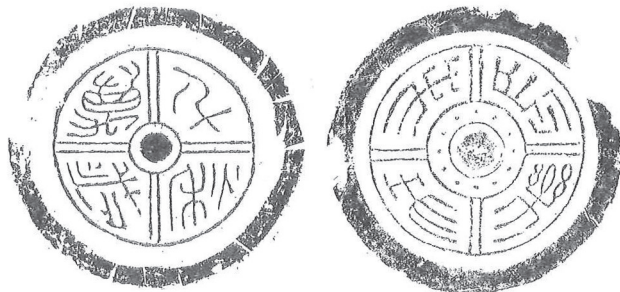
私は多宝塔供養願文から、創建浄妙寺が総瓦葺だったと考える。同願文は藤原氏の墓所を供養するため浄妙寺を創建したという由来は略記し「其由緒、詳見寛弘二年十月供養寺之願文矣」と三昧堂供養願文との重複を避ける。一方「道場之体」を備えているが、浄妙

寺に塔がないと述べ(唯其所無者、塔婆而已)、造塔の功德を力説して、新たに多宝塔を建てたことを強調する。以下、願文は建った塔の素晴らしさを描写し、もたらす功德についての美辞麗句が並ぶ。その中に「古の塔の瓦文に<万歳千秋楽未央>の七字あり。その<楽>字の趣を推すに、感涙禁じがたし。現世には則ち<天下太平 理世安楽>の楽、後世にはまた<地下抜苦 往生極楽>の楽なり。弟子の願うところ、すでに瓦文と同じ(古之塔瓦文、有万歳千秋楽未央之七字。推其楽字之趣、感涙難禁。現世則天下太平、理世安楽之楽。後世亦地下抜苦、往生極楽之楽。弟子所願、已同瓦文)」の句がある。

「千秋万歳」「長楽未央」の吉祥句が古代中国、おもに漢代の宮殿や墳墓に葺いた軒丸瓦の瓦当文様にある(図4)ことを、現代の我々はよく知っているが、大江匡衡が同じ知識を持っていたとは驚きである。「(嘉辰令月歆無極)万歳千秋楽未央」の句は、藤原公任『和漢朗詠集』下巻「祝」項774に、隋唐代の文人で政治家の謝偃作として掲載されており、この吉祥句自体は平安貴族に周知されていた。同じ「祝」項の和歌には「わがきみは千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」が掲載されている。しかし、「万歳千秋楽未央」の句が瓦文にあることは『和漢朗詠集』になく、大江匡衡独自の知識らしい。匡衡の曾孫の大江匡房『江談抄』第4(112)は、古塔の瓦銘「万歳千秋楽未央」の由来を出典を挙げて説明するので、大江一族は同じ知識を共有したようである。

「千秋万歳」「長楽未央」は建物や政権あるいは被葬者の魂の永続性を願う吉祥句である。多宝塔供養願文では、瓦当文様の「万歳千秋楽未央」銘が現世の安寧や来世の極楽往生を願うもので、それは弟子(道長)の願いと同じだと述べている。それは新たに建てた多宝塔の素晴らしさを形容する美辞麗句の一つである。肝心の多宝塔自体が総瓦葺よりも見劣りして格が落ちる檜皮葺屋根だったなら、願文として格好がつかない。当然、多宝塔よりもメインの三昧堂も総瓦葺だったに違いない。なお、浄妙寺では法華三昧堂造営時に近くで梵鐘を鑄造している。たとえ創建瓦を

廃棄した良好な瓦溜がなくとも、鑄造終了後ただちに埋め戻す鑄造土坑から廃棄瓦が出土すれば、私見は考



景帝陵園探集(咸陽博物館蔵) 漢長安城出土(陝西省博物館蔵)

図4 「千秋万歳」「長楽未央」銘瓦当(陝西省考古研1987)

漢代の宮殿や陵墓から「千秋万歳」「長楽未央」等の文字瓦当が出土する。建物や居住者が永遠の存在で、楽が長く尽きぬことを願う吉祥句である。大江匡衡・匡房がこれを知っていたとは驚きだが、実物を見たはずがないので、「瓦文」は瓦当文様ではなく瓦文字の意味かもしれない。いずれにせよ匡衡は浄妙寺多宝塔の勇姿や功德を讃える願文を作ったので、その屋根は総瓦葺に違いない。創建浄妙寺を檜皮葺とする定説は再考を要する。

古学的に検証可能なはずである。

(うえはら・まひと = 当調査研究センター理事長、京都大学名誉教授)

参考文献

- 荒川 史・浜中邦弘ほか 1992『木幡浄妙寺跡発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第4冊
荒川 史 2005「浄妙寺と宇治陵墓群」『佛教藝術』279号(特集 宇治の考古学・藤原氏別業の世界)
毎日新聞社
五十川伸矢 2016『東アジア梵鐘生産史の研究』岩田書院
上原真人 2001「香衡の持仏堂－平泉柳の御所遺跡出土瓦の一解釈－」『京都大学文学部研究紀要』
第40号 京都大学大学院文学研究科
上原真人 2006「院政期平安宮－瓦からみた－」『院政期の内裏・大内裏と院御所』平安京・京都研
究叢書1(高橋昌明編)文理閣
上原真人 2010「摂関院政期の京都における丹波系軒瓦の動向」『佛教藝術』308号、毎日新聞社
上原真人 2013「寺院と墓地」『事典 墓の考古学』(土生田純之編)第IV章古代、吉川弘文館
植山 茂 1999「平安時代中期の官瓦窯について」『瓦衣千年(森都夫先生還暦記念論文集)』
宇治市歴史まちづくり推進課 2010『浄妙寺跡発掘調査説明会当日資料』(平成22年4月17日)
堅田 修 1965「藤原道長の浄妙寺について－摂関寺院の一形態に関する考察－」『摂関時代史の研究』
古代学協會編、吉川弘文館(『日本古代寺院史の研究』法藏館1991年所収)
神崎 勝 1993「梵鐘の鑄造遺跡とその変遷」『考古学研究』第40巻第1号、考古学研究会
木村捷三郎 1969「平安中期の瓦についての私見」『延喜天曆時代の研究』古代学協會編、吉川弘文
館(『造瓦と考古学(木村捷三郎先生頌寿記念論集)』1976年所収)
京都国立博物館 2007『藤原道長－極めた栄華・願った浄土－』金峯山埋経一千年記念特別展覧会
倉本一宏 2009『藤原道長「御堂閔白記」全現代語訳』(上)(中)(下)、講談社学術文庫
繁田信一 2023『孫の孫が語る藤原道長－百年後から見た王朝時代－』吉川弘文館
清水 擴 1992『平安時代仏教建築史の研究－浄土教建築を中心に－』中央公論美術出版
杉本 宏 2006『宇治遺跡群－藤原氏が残した平安王朝遺跡－』日本の遺跡6、同成社
杉山 洋 1995『梵鐘』日本の美術第355号、至文堂
鈴木弘太 2010「鎌倉の墳墓堂」『古代・中世の墳墓堂を考える』中世葬送墓制研究会
陝西省考古研究所秦漢研究室 1987年『新編秦漢瓦当図録』三秦出版社
中世葬送墓制研究会 2010年『古代・中世の墳墓堂を考える』
根立研介 2004「安祥寺五智如来像の造像と仏師工房」『安祥寺の研究I－京都市山科区所在の平安
時代初期の山林寺院－』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム成果報告書
波多野忠雅 1969年「藤原道長浄妙寺創建考－造営の背景に対する再検討を基調として－」『史泉』
第39号、関西大学史学会
浜中邦広 2007「創建期浄妙寺に関する一考察－出土軒瓦をもとに－」『考古学に学ぶⅢ(森浩一
先生傘寿記念献呈論集)』同志社大学考古学シリーズIX
浜中邦広 2024「頼通とその一門の考古学的検討－平等院・宇治を中心に－」『日本史研究』第746号(特
集 藤原頼通政権を考える)日本史研究会
林屋辰三郎 1941「藤原道長の浄妙寺について」『史蹟名勝天然記念物』第16巻7～9号、史蹟名勝
天然記念物保存協会(『古代國家の解體』東京大學出版會1955年所収)
藤島亥治郎 1995『平泉建築文化研究』吉川弘文館
山中 裕 1988『藤原道長』教育社歴史新書(2023年に法藏館文庫で改訂版刊行)